
神の世界で踊る者

nab42

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神の世界で踊る者

【Nコード】

N5611T

【作者名】

nab42

【あらすじ】

兄を殺されたオルガと、恋人を殺されたピピ。四つ神が創ったとされる世界で、二人は復讐へと歩を進める。

ヘクルプル大陸の最東にある国、アウグスト。その国にあるアメルという街は海に面していた。街は崖に沿って作られており、住民の多くはそこに家を建て住んでいた。街の大きな通りは海に平行して三つあり、一番上の通り沿いにはホテルやレストランが、真ん中の通りには役所や商店が並び、一番下には漁師たちの組合と彼らの住処、そして馴染み客の集まる飲食店が集まっていた。

この街の主な特産物は牡蠣や帆立といった貝類などの海産物、そして、街の後ろにある丘や山にある畑から採れる夏みかんである。それらは海路でアウグストの首都や同盟国、東の大陸へと運ばれる。だが、これらが一番の産業ではない。この街の主な産業は観光業だった。この地域の気候は抜群に良く、夏は涼しく、冬は比較的暖かった。そのため避暑地や避寒地として重宝された。雨季は十月に十日ほどあるが、それを嫌に思う人はいなかった。アメルの人々にしてみれば、それは観光客のあまり来ない休みの日として、大いに喜ばれた。さらにアメルの上には、ゴルトンと呼ばれている島があった。そこを訪れるために、まずアメルで一泊するというのが多くの観光客の常であり、習わしのようなものだった。島には高さが異なる塔がいくつも建っていた。一番高い塔はアメルの上からも見え、日の出と共に、その塔の影が街へと流れた。その塔の頂上からは世界が一望できるといった噂もあった。島にある塔は誰がどのようなように建てたのか分かっていなかったが、人々は、誰が疑うこともなく神が建てたのだと確信していた。問題は、どの神が建てたかということだけだった。あるものは海の神だと言い、あるものは島の神、もしくは空の神だと言った。だが、アメルの人々は星の神だと信じていた。アメルという街は元々、星の神を信仰している人々で作った街なのだ。

この世界は火の神、水の神、風の神、土の神の四つ神が創った。その世界から様々な神が生まれた。それらの神は四つ神のいずれかを親に持ち、その他の神に兄弟を持った。多くの神は自然を創り、司ったが、二級神であった生死の神は、一級神になるため動物を創った。そして、その時生まれたのが戦いの神であった。生と死の神は、この事を四つ神に伝えず、自らで管理しようとする。だが、戦いの神は生死の神には従わず、どんどんと力を蓄え、攻の神と守の神という新たな神を作りだした。戦いの神は攻の神と守の神を使い、生死の神を二つに分け、生の神、死の神とした。二つの神は自らが生み出した子神、戦いの神に支配された。同時期に戦いの神は人間を作る武具に目をつけた。そして、生の神と死の神を使い、争いを起こさせる。それは四つ神が創りだした世界を自分のものにするためだった。その頃、ようやく四つ神は世界の異変に気付く。しかし、戦いの神の力は強大なものになっており、人々は神界に届く山、ベドザリーでさえも戦いを繰り返していた。四つ神は争いを収めるために龍人と呼ばれる神の使いを世界へと送る。彼らは人々を四つ神から授かった様々な神力で抑えた。しかし、戦いの神は人々をさらに焚き付け、神殺しの命を出す。その勢いは龍人たちにも抑えることが難しく、四つ神はついに自らが創った世界において、戦いの場に出てきた。これを待っていた戦いの神は四つ神を殺そうとするが、四つ神は抵抗し、相打ちとなる。この時に全ての神の力は弱まり、世界に溶ける。全ての神は力を蓄えるために、長い眠りについた。残ったのは神の創った世界、自然や動物、少しの人々と龍人、そして人々の作った武具。ベドザリー山に埋もれた武具は神武具と呼ばれている。それらには神の力が宿っており、錆びたり、折れたり、欠けたりすることがない。

「それが、この世界の簡単な歴史だな」
オルガルデピリオは、若い漁師が小さな子供たちにそう説明するのを聞きながら、パンと帆立入りのスクランブルエッグを食べてい

た。本当に簡単な説明だなどオルガは思ったが、それに何を付け足すべきかは分からなかった。

小さな食堂がある第一通りでは、漁から帰ってきた父親と遊ぶ小さな子供たちがたくさん見られた。オルガは週に四日か五日は、それを見ながら昼食をとるのが日課だった。

オルガは宿屋で働いていた。一番上の第三通りにある、観光客用のホテルではなく、出稼ぎに来た人や、旅人のための安宿が彼の職場だった。主な仕事は部屋の掃除だった。だが、それだけで食っていくことは出来ず、近くにある食堂やパブでウェイターや手伝いをして暮らしていた。しかし、多くの人がそれらを彼の仕事だとは思っていなかった。彼は多くの人が思っている彼の仕事の事を、「お遊び」と呼んでいた。実際、それは彼にとって簡単に出来ることだった。他人はその「お遊び」を拍手喝さいで迎えてくれるが、彼にとって自慢できるものではなかった。だが、その「お遊び」がいい小遣い稼ぎになることは承知していた。

「今日も投げるのかい？」と腕を振りながら若い漁師が食堂に入ってきた。

「たぶん、投げるよ。今日はアンジェホテルで投げるんだ」

「へえ。じゃあ、随分稼げるな」

「そう願うよ。でも、もうすぐ雨季だからね。あんまり人はいそうにないよ」

「お前の仕事にも時期っていうものが、あるんだな」

「そういったものは何事にもあるよ。それよりも、賭けるかい？」

「はっ」と若い漁師は笑った。「賭けになるもんかい」

日が沈むと、オルガは階段を上がり、第三通りへと出た。そして北に少し歩いた。アンジェホテルの、噴水や星の女神の彫像がある玄関を通り過ぎ、隣のホテルの塀とアンジェホテルの塀の間にある細い道へと入った。その道を進むと、少しひらけた場所に出た。アンジェホテル側の塀には、縦長の入口があいていて、その上には同じ材料で作られた質素なアーチがかかっていた。オルガはそこに入

つて、アンジェホテルの裏口から中へと入った。

宿泊客が食事をとっている会場にオルガが入ったのは、彼らがデザートを食べ終わり、食後にブドウ酒を飲んでいる頃だった。彼は普段着ない、恭しい服装に着替えていた。皺一つない黒いズボンにパリツとした白く清潔なシャツは着心地が悪かった。

司会者はオルガを、海が見える一番目立つ場所に移動させた。

「さあ！ ここにいる若い青年！ 歳は十七だが、腕は確かだ！

ええ？ 何をするのかって？ もちろん、お客様も分かっておりますでしょう。この青年、この歳でナイフ投げの名手なのです」と口ひげを上品に生やした司会者は言つて、オルガの左手を掴んで掲げた。

驚いたか驚いていないか、宿泊客は拍手で彼を迎えた。オルガはその反応を、ありがたいと思つたかのように笑顔をつくり、軽くお辞儀をした。

「名をオルガルデピリオ。そう、街の近くにある星の神の使いが現れたという丘を守りし一族の一人であります。黒い髪に数本見え隠れする金色の髪。これが星の神に関係しているという何よりもの証拠。彼は星の腕と名付けられた通りに、この両腕でナイフを操ります」

この司会者は外見とは違い、お喋りにあまり気を使わないのかな、とオルガは思つた。星の腕。今は亡き両親が彼に付けた名前だった。「さあ！ さつそく、その技を見せていただきましょう。まず、あそこにある的。あれにナイフを当てて貰いましょう」

オルガは司会者が手で示した方向を見た。オルガが入つて来た扉の横に、大きく輪切りにされた木があった。直径はオルガの片腕くらいだった。

オルガは腰に隠していたナイフを手にとつた。客は彼を鼓舞するかのように拍手をした。彼は客の緊張を高めるため、拍手が消えて静かになるまで間を置いた。ワイングラスがテーブルに置かれる音や衣擦れ、客のひそひそ声が目立ってくると、ナイフの柄を握り、

的の方へと投げた。ナイフは回転せずに、ほぼ真つすぐの軌道で空中を進んでいった。客はそのナイフの軌道を、首を回しながら追いかけた。オルガを見ていた多くの目が、一斉に反対側に向くのをオルガは楽しんだ。ナイフは見事、的の真ん中に突き刺さった。

彼には、その「お遊び」は簡単なことだった。目を閉じてでも出来た。寝ていてもできるかもしれない。だが、それは星の守り人として生まれてきただけでは習得できないものだった。子供の頃から、ナイフを投げてきたからこそ出来るものだった。

その後、オルガはいくつかの木の的にナイフを投げ、テーブルに並べられた蠟燭の火を消し、最後は美女の頭の上に乗せたフルーツに投げた。客は彼のために、いくらのお金をテーブルに置いて、会場から出て行った。疲れた者は部屋へ、飲み足りないものはバーや街へと出かけた。給仕は食器を片づけ、オルガのために置かれたお金を集めた。オルガはそこからいくらかを貰い、控室に戻り、普段の着心地のいい服装に着替えた。皺のあるパンツに、柔らかいシャツが彼のお気に入りだった。

ホテルを出て通りに出ると、「終わった？」と女がオルガに話しかけた。

「終わった……けど」と彼は躊躇いがちに返事をした。

「じゃあ、お金くれない？」と女は言った。

女は銀色の長い髪と淡い金色の瞳を持っていた。目元は大人っぽく上品で、落ち着いた雰囲気を表していたが、頬は少しふくよかで、幼いと思わせた。そんな複雑な印象を彼女は持っていたが、ほとんどの男は彼女のことを「美女」と呼んだ。

「嫌だよ」

「なんでー？ 頂戴よ」

「お前ね。自分で稼いだらどうなの？ そんな外見なんだし、体を売れとは言わないけど、お酒を注ぐだけでも稼げるだろう」

「嫌」

彼女がそう言うと、オルガは渋々、今さっき貰ったお金の半分を彼女に渡した。

「ありがとう。さすがオルガ」

「また酒に使うの？」

「半分はそう。半分は洋服代とかに消える」

「ああ、そう」とオルガはため息まじりに言った。

「うん。じゃ、私はこれで」と彼女は手のひらをオルガに見せて、下へと続く階段へ消えた。彼女がはいていたロングスカートの赤い色がオルガの目にまわりついた。

「ピピのやつ……」。そう呟いて、オルガは彼女の心境について考えた。だが、詳しいことは何も出てこなかった。彼女の心境について考える時、オルガの頭に出てくるのはいつも兄だった。ナイフの投げ方を教えてくれた兄。そして、兄の恋人だったピピ。

オルガは空を見上げた。いくつもの星が瞬いていた。

兄の事を考えた。オルガより、八つ年上だった兄。不思議な力を持っていた兄。血の繋がりが無い兄。それでも仲良しだった。

そんなことを考えていると無性に悲しい気持ちになっていた。お酒を飲みたいな、オルガはそう思ったが、それを本気で欲するほどではなかった。だが、ピピはどうだろうかと考えた。そうすると、また兄が出てきた。

「ああ！」とオルガは大声を出した。そのせいで、通りにいた何人かは驚き彼を見た。

オルガはピピと同じように階段を下った。だが行く場所は違った。彼は明日のために、今日はもう寝ることにした。

太陽が海面からしつかりと姿を現した頃に、オルガは目を覚ました。

オルガの家は、第一通りと第二通りの間にあった。料理店をやっていた両親が残してくれた家で、四階建ての三階部分がそれだった。リビングとキッチン、バスとトイレが付き、大小合わせて、部屋は四つあった。一つは両親の部屋、一つは兄の部屋、一つは書斎、最後の一つがオルガの部屋だった。彼の部屋には子供の頃から使っていたナラの机、腰までの高さの本棚、大きめのクローゼット、そしてベッドが二つあった。

オルガはベッドから起き上がると、まず海側についている窓を開けた。この季節の朝は肌寒く感じるが、海から来る風は、彼の朝にはなくてはならないものだった。潮の少し生っぱいにおいは、彼に幼少時の記憶を思い起こさせた。

ギギッとベッドが軋み、衣擦れの音がした。オルガは自分が使っていないもう一つのベッドを見た。そこには案の定、ピピが眠っていた。寒そうに毛布を体に巻いて、壁の方を向いて寝ていた。

ほとんどの朝と同じ朝だった。オルガが毎朝、窓を開けるのは部屋の中に籠っているアルコール臭を逃がすためだった。

窓からは下にある住居の屋上が見えた。屋上では役所で働くおじさんが、体操をしていた。

「おはよう」とおじさんはオルガに気付いて挨拶をした。

「おはようございます」とオルガは返した。

これもほとんどの朝と同じだった。

窓を開けたまま、オルガは寝間着から、仕事着に着替えた。彼の体には少し大きすぎる、ゆったりとしたシャツと、何か所か破れたところを補修したズボンが彼の仕事着だった。

オルガは家を出て、まず第一通りに出た。そして、水売りから水

を一杯買い、それを飲んでから食堂へと向かった。

食堂には誰もいなかった。テーブルには、使用済みの食器がいくつか乗っていた。そして、何匹かの猫もテーブルの上で横になっていた。

オルガの職場の一つが、この食堂「猫」であった。名前の由来はもちろん、食堂に集まる猫からだった。何匹出入りしているか、正確な数は分からなかったが、少なくとも十匹はそこを根城としていた。

オルガはテーブルにあった食器を、キッチンに持っていった。キッチンには多くの食器が洗いものとして置かれていた。それを女将さんの代わりに洗うのが彼の仕事だった。

仕事は何の問題もなく進んだ。瓶に貯めてある水で食器の汚れを洗い流し、布巾でそれらを拭いた。そして、食器棚に戻した。

「すまない。誰がいるかい？」

ほとんど片がついた頃に、誰かが食堂の方から呼んだ。

「はい」とオルガは返事をしながら、声がした方へと向かった。

麦で編んだ帽子を被った男がそこにいた。帽子には小さな穴が空いていて、彼が着ている服には汗染みがあった。深い青に染められていたシャツは、さらに濃い色になっていた。視線を下げると、腰に長剣が差してあった。

「どうかしました？」

「いや、飯は食えないのかい？」と男は頬にある無精髭の感触を確かめながら言った。

「ああ、朝はもう終わりましたよ」

「そうか。でも、なんでも良いから貰えないかな。パンでもいいんだ。金ならある」

「ええ、まあ、簡単なものなら僕でも作りますけど」

「じゃあ、頼む」そう言って、男はテーブルに座った。

オルガはキッチンに戻り、ベーコンを焼き、卵を目玉焼きにした。そして、トーストを皿に盛った。それを彼のテーブルへと持ってい

った。

「ありがとう」と男は言っ、汚れを落とすように手を叩いた。「いくらい？」

「五モールでどうです？」

「いいよ」と男は言っ、ポケットから一モール硬貨を五枚出した。「旅人ですか？」とオルガは聞いた。

「みたいなものだよ。あ、飲み物はあるかい？」

「ブドウ酒でいいなら」

「いくらい？」

「一杯二モールです。水が飲みたいのなら、水売りから買って下さい」

「ブドウ酒をくれ」

オルガは男にブドウ酒を渡し、代金を貰うと、残りの仕事を終わらせにかかった。そして、それはすぐに終わり、残す仕事は男が使っている皿とコップを洗い、水滴を拭き、食器棚に戻すだけになった。

オルガは椅子に座り、テーブルの上に寝転がっている猫を撫でながら、男の背中を見て、考えた。男の歳は三十くらいだろうか。腰に剣を差しているが、あれは幾らだろうか。どこ出身だろうか。何のために、このアメル街へ来ているのだろうか。そんなことを思案しているうちに、オルガは思った。なぜ、彼は帽子を脱がないのだろうか、と。しばらく考えたが、答えが出る前にオルガは、今夜のことを考え始めていた。今夜はレストランで「お遊び」だった。レストランでの報酬は、店からいくらか貰うだけだったので、それほど稼ぎにはならなかった。

「うん。おいしかったよ」と男は言っ、椅子から立ち上がった。そして、オルガの方を少し振りかえっ、手を上げ、食堂から出て行っ。逆光で、男の顔はよく見えなかったが、髪の毛の色が明るかったような気がした。

食堂での仕事が終わると、次は宿屋へと向かった。食堂から南に

少し歩いたところに宿屋はあった。一部屋にベッドが四つある安宿で、客のほとんどが若い旅人だった。

「おはようございます」とオルガは、玄関前を掃除していたオーナーに挨拶をした。

「おはよう、オルガ」とオーナーの男は返した。

この男は、アルベスオ・ピリオンといった。オルガと同じ姓を持つ、星を守る一族の一人である。

街のはずれにある丘には星の降臨地と呼ばれる遺跡がある。そこには直径が数メートルある大きな穴が開いていて、その周りに大きな岩がいくつか並べられている。街に残されているある漁師の伝記によると、ある日、そこに星の神の使いが舞い降りたとされている。その使いは、ただの小さな村だったこのアメルを数日で大きな街に発展させたという。その後、その使いは大きく開いた穴に入ると消えてしまった。アメルに住んでいた人々は、使いが現れ、消えた場所を神聖な処とし、守ることにした。その時に姓をピリオンとし、代々それを受け継いできたのが、星を守る一族だった。一族かそうでないかを見分ける方法は二つあった。一つは姓、もう一つは髪の毛だった。一族のほとんどは黒髪で、その中に数本の金髪を持っていたからだ。

「明日は、降臨地に行くんだろ？」

「はい。明日は僕の番です」

「今日は、うちの息子だよ。ちゃんといればいいんだが。オルガと同じ歳だというのに、あいつは辛抱が足りないからな」

オルガはどういった反応をしているのか分からず、少し笑って宿屋の中に入った。

宿屋の小さなフロントにはアルベスオの娘、クレルがいた。

「おはよう、クレル」

「おはよう、オルガ」

クレルはいつものように長い髪の毛を後ろで一つに括っていた。仕事をしている時は、いつも彼女はそうしていた。

クレルはオルガの一つ年上だった。だが、オルガは彼女の弟よりも、彼女と遊ぶ方が多かった。そのせいか、弟はオルガをあまり好んでいなかった。女と遊ぶ変なやつと思っていたし、姉を取るのではないかと、ある種の嫉妬心を持っていた。クレルは対照的にオルガを一番の仲良しとしていた。成長してもそれは変わらなかった。恋愛感情はないけれど、夫にするならば彼は申し分ない人と思っていた。

「今、どの部屋が空いているの？」

「三番と五番……と、七番が空いてるね」とクレルは宿帳を見ながら答えた。

「三番と五番と七番ね」とオルガは繰り返した。

オルガは空き室で使われていた布団を屋上に持っていく、物干し竿にかけた。ベッドのシーツは全て中庭に持っていく。それをクレルが大きな桶で洗い、その間に彼は空き室の窓や壁をはたき、床を掃き、水拭きをした。それが終わると、シーツと布団を新しいものに替えた。最後の仕事は中庭にあるシーツを屋上に持っていく、物干し竿にかけ、干すことだった。屋上へ行くと、いつも通り、最初に干していた布団はクレルによって取りこまれていた。

シーツを全部干し終わると、クレルがやって来た。

「相変わらず仕事早いね」とクレルは言い、後ろに纏めていた髪をほどいた。

「そっちこそ」

「そんなに頑張っても、お父さん、あんまりお金くれないよ？」

「いいよ。いらなくらいだよ」とオルガは言って笑った。「父さんが寝込んだ時、一番に助けてくれたのはおじさんだったからね」

「もう一年だね」

「うん。もう一年だよ」

「ピピさんはどう？ 元気？」

「元気だよ。毎日、お酒飲んでいるからね」

「ふーん」

オルガとクレルは屋上に置いてある椅子に座り、海を眺めた。ここでしばしの休憩をとるのはいつものことだった。しばらくすると二人はお互いを見つめた。そういった行為に恥ずかしさは全くなかった。

「そういえばね。最近、なんか変わったお客さんが多いの」

「変わったお客さん？」

「うん。ちよつと怖くて、腰に剣を差していたり、背中に剣背負ったりしている人たち。お父さんはハンターだろうって。だから私、夜はすぐ家に帰らされるの。仕事しないでいいのは嬉しいんだけどね」

「へえ。ハンターねえ……。じゃあ、今日見た人もハンターだったかもしれない」

「どんな人だったの？」と言って、クレルは片肘を手摺壁の上についた。艶のあるさらりとした黒髪が、風で少しなびいた。

「麦わら帽子をかぶっていて……。あとは、剣を腰に差していた……。それくらいしか覚えてないや」

「ふーん。まあ、私たちには関係のないことだよ。ハンターが誰を捕まえにこの街に来ているのか知らないけど、早くどうにかなって欲しい」

「どうにか？」

「そう。どうにか……。何事もなく」

「何事もなく」

「うん。何事もなく、いつも通りに」

この日の最後の仕事である、レストランでの「お遊び」が終わると、オルガの前には昨日と同じようにピピが現れた。

「こんばんは」とピピは言った。今日は緑色のロングスカートをはいていた。

「また飲み代？」とオルガはポケットに手をつ込みながら言った。ピピは黙って首を横に振った。

「じゃあ、何？」

「お願いがあるんだけど」

「お願い？ そんなこと、今までも叶えてきたつもりだけどね」

「うん。でも申し訳なくて」

「申し訳ない？ それは驚きだな」

「え？ なんで？」

「そういう気持ちもあつたんだなと思ってさ」

「あるよ。ちゃんと」

「で、どうしたの？ 服だけじゃなくて装飾品も欲しくなったの？」
とオルガは言い、鼻で笑った。

「違うけど、三百モール貸して」とピピは手を出して言った。無垢な少女が言ったかのような軽い響きだった。

オルガは、彼女の淡い金色の瞳を黙って見ていた。

自らの嘲りが無意味だったことにさえ、まだ気づいていなかった。

レストランを照らしていたいくつもの炎は、自分はただ燃えるだけ、誰にも関しない、といったように燃え続けていた。通りを歩く人々もまた、何にも興味がないように黙々と自分たちが望んでいるだけの行動をしていた。だが、そう思ったのはオルガだけだった。炎にも人々にも他者に関係する余裕はあった。世界から浮いた存在になったような、時間の神が自分だけを瞬間に残したような気がしたのは、オルガの気のせいだった。

オルガは強者に睨まれた動物のように、身動きを取らず、状況がどう動くのか辛抱強く待った。

強者であったピピは、出した手を引っ込めず、そのまま一步前にでた。

オルガはその行動を見ていたが、それに対応して動くことはできなかった。

「三百モール。お金貸して。くれって言うっているわけじゃないよ。すぐ返すし」

「いや……」とオルガは彼女の声に反応したが、言葉を受け取るのには時間がかかった。「そういうこと言われても」

「これ、本当のお願いだから。何なら今まで貰ったお金も返す」

「いや……。その前に何に使うのですか、姉さん」

「姉さん？」とピピは、その言葉に引っかかった。「久しぶりだね、その呼び方」

「いや……。何に使うのか教えてくれ」

「それは秘密」

「じゃあ、貸せない」

「じゃあ、貰う」とピピは笑顔を作って言った。

「貰う？」とオルガは怪訝な顔をした。

「ベッド、本棚、キッチン」

「ベッド、本棚、キッチン。確かにそうだな」とオルガはお金が隠してある場所を思い浮かべながら言った。顔に妙な笑い皺ができた。「貸してくれないなら、貰うよ?」

「貰わせない」

「じゃあ、昔みたいにかけっこする?」

「子供の頃と違うんだ」

「でも、どっちが早いか一目瞭然だよ?」

オルガは何も言わなかった。確かに、競争を始めれば一目瞭然だろう。

「分かった。だけど、ちょっと歩こう。最近何も話せていなかったからね」

オルガがそう言っただけで、ゆっくりと南に向かって歩きだすと、ピピは彼の横に付いて一緒に歩き出した。

「なんで教えてくれないんだ? 何に使いたいくらい言ってくれてもいいだろう。俺の金なんだ」

「うん」

ピピはそう言ったが、何も口に出そうとはしなかった。オルガは仕方なく黙って歩いたが、今度ばかりはお金を渡すつもりはなかった。

今日は月が出ていた。そのせいで夜道は明るく、夜空に散らばっている星々は主張を穏やかにしていた。

「月が出てるね」とオルガは横を歩くピピに言った。

「そうだね」

「昨日は出ていなかったんだけどなあ」

「昨日も出てたよ」

「でも、昨日は見えてないよ」

「見えてないだけだよ」

「そんなことつてあるのかな?」

「月も星の一つだよ。月の神は、星の神の親だもの。今、見えてない星があるように、昨日は月が見えない番だったんだよ」

ピピは白銀の髪のをかきあげた。彼女の横顔が耳まで、しっかりと見えた。すつきりとした、整った耳を彼女は持っていた。

「そういえば、神様のことをよく知らないな、俺は」

「星の神は出会いと別れの神様でもあるのよ。知ってた？」

「へえ。知らなかったな」

「うん……。だからね……」

「だから？」

家へと戻るために、いつも使っている階段を降りはじめるとピピは足を止めた。

「だから私は、あの人を殺したやつを殺すの」

オルガは振りかえり、ピピを見上げた。月明かりに照らされた女の顔には意思が強く表れていた。金色の眼差しはしっかりとオルガを捉えていた。オルガはまた身動きが取れなくなっていた。柔らかい、しかし、鋭い何かを彼は突き付けられていた。

「兄貴の……」

オルガはそう口を動かし、ピピの心持を計った。そしてやはり、三年前に殺された兄、ピリオーノが次第に彼の頭を占拠し始めた。

ピリオーノは星の降臨地に捨てられていた。しかし、人々は捨てられていたと言わなかった。生まれた、そう言った。

ピリオーノは金の髪を持った子供だった。星の守り人とは逆で、金髪に数本の黒髪が見え隠れしていた。

ピリオーノを引き取ったのは、ハキキセリオムと呼ばれていた男とその妻だった。男の方は星の守り人で、女の方は商人の娘だった。彼らに子供はなく、そのため強く申し出たのだった。ピリオーノという名前も彼らがつけた。流れ星という意味だった。

ピリオーノは一人で捨てられたわけではなかった。星の降臨地の岩に置かれた彼の横には、一本の剣が置かれていた。細長い両刃の剣だった。育ての親がそれを危ないからと遠ざけると、彼は狂ったように泣きはじめのだった。

ピリオーノはすすくと育った。普通の子供と同じように、親を楽しませ、困らせた。しかし、彼はどこか不思議な雰囲気を持つ子供だった。暇があると星の降臨地へ行き、剣を振った。一日何もしゃべらず、岩の上に座って何かを考える時もあった。そこには誰も寄せ付けないような空気があり、誰もが興味を惹かれるような空気があった。

彼が八歳になった頃、子供のできなかった夫婦に男の子が誕生した。オルガルデピリオと夫婦は名付けた。ピリオーノは血のつながっていない彼を拒絶することなく、誕生を素直に喜んだ。

オルガが歩けるようになると、ピリオーノは彼を色々な場所へと連れて行った。街中を走り、丘を登り、山ではしゃいだ。彼が四歳になると、ピリオーノはナイフをプレゼントした。そして、ナイフ投げを教え、それを練習させた。

十二歳になったピリオーノは、街で開かれた剣術大会に出た。結果、見事に優勝した。子供ながら、巧みな剣さばきを見せ、大人たちを驚かせた。街の自警団は彼を、仲間にしようとしたが、彼自身はそれを嫌がった。「できるだけ自由でいたい」と彼は言った。

十七歳になっても、彼は働かなかった。その日のほとんどを剣と他人と関わらない何かに費やした。

その頃に、ピピが現れた。彼女は街の人間ではなかった。外からやってきた人間でもなかった。誰も彼女がどこからやってきたのか分からなかった。知っているのは彼女とピリオーノ、そしてオルガだけだった。

彼女はピリオーノが赤ん坊の時から、ずっと一緒にいたあの剣だった。ピリオーノの傍に置かれていた剣は、神武具と呼ばれていた神の遺産であった。そして、ピリオーノ自身も神武具だった。

神武具は、武具と様々なものが合わさった混ざりものだった。剣の姿だけのもの、動物に変身できるもの、人間に変身できるもの、または、その両方に変身できるものがあった。ピリオーノは人間に変身ができ、ピピは人間と山犬の姿に変身できた。

しかし、ピリオーノには所有者というものがいなかった。ゆえに、彼は武具の姿へは戻れなかった。だが、彼がそれを悲しく思うことはなかった。ピリオーノは何者にも、何事にも支配されなくなかった。

彼が人間の姿をしたピピを剣に戻すことはほなかった。ただ一年に一度、彼女を剣へと戻した。彼はピピに永遠に美しくいてほしかった。彼女が人間の時に作った切り傷や火傷跡は、その度に消えた。

ピピと一緒に住まわすために、ピリオーノは親に頼み、その条件であった自警団に入った。

そこで彼の力は存分に発揮された。彼の持つ雰囲気と剣技に、並の悪党はひれ伏し、それなりの悪党は切り殺された。

弟のオルガも、ピリオーノの薦めで十三歳の時に自警団に入った。彼らの両親は反対したが、「何かあったら絶対に守る」という長男の誓いを信用し、最終的には入団を認めた。ピリオーノと違い、親しみやすい雰囲気を持っていた弟は、すんなりと大人たちに溶け込んだ。ピリオーノは簡単な仕事を彼に任せ、自分は前と同じとはいかずとも、再び多くの自由な時間を得た。

ピピがいて、弟がいて、両親がいて、自由な時間があつて、自分がいた。幸せな時間だった。

だが、それは自分の死によって簡単に崩れた。一番信賴していたものから無くなったのだった。

ピリオーノが二十二歳になった年の夏だった。グランドという盗賊がつくった小規模の盗賊団がアルメにやって来た。彼らは金に換えられるものを盗み、強奪し、それらを売りとばしていた。自分たちの求めるものを得るためになら、町を荒らし、村を燃やし、人の命を奪うことさえやった。そして、その行為を悪行とは思っていなかった。グランドにとって、自分の欲望に背くことが一番の悪であった。

ピリオーノがピピと星の降臨地で話をしていると、山の方から二

十名ほどの男たちがやってくるのが見えた。彼は男たちの異様な雰囲気警戒し、ピピを街に行かせ、自警団員にその事を伝えるように頼んだ。

盗賊たちはピリオノを発見し、近づいた。

一番後ろにいたグランドはピリオノに聞いた。

「どこにいいものがあるんだ？」

「ここに」とピリオノは言った。

「確かに、金は持っていそうだな」

「いいや、金目のものは何も持つてはいない。いいものは全てここにあるけどな」

「なるほど。じゃあ、それを貰おう。だが、その前に聞きたい。あれは何だ？」とグランドは遠くに見える塔を指差した。

「あれは塔だよ。島にある。神が作ったそうだ」

「あそこにもいいものがありそうだな」

「さあ。行ったことないよ」

「いいものがありそうなのにか？」

「言っただろう。いいものは全てここにあるんだ」

会話が終わると、グランドとピリオノはほぼ同時に剣を抜いた。それにつられるように、盗賊たちは各々の得物を手に取った。

ピリオノは剣を振り上げた。一人の男の両手首が宙にはねる。

男の吐くような絶叫が耳に届いた瞬間、横にいた男の首筋は切り裂かれ、そこから勢いよく血が吹き出る。

その暖かいものがかった男が、驚きの反応を剣に任せる。だが、ピリオノは素直すぎるそれを避け、同時に剣を返し、腹を裂く。

その中身が地面に落ちるとグランドは飛び出した。

「お見事」

小さくそう言うと、グランドはピリオノの胸に剣を突き刺した。幾多もの、小さくも特異な存在を証明するに足りる武勇伝を残してきた男の、呆気ない幕切れだった。

「俺を殺してどうなる？」とピリオノは最後に聞いた。

「いいものを貰う」

「いいものだ？ そんなもの、もうなくなる」

「知っている。いいものだったよ」

グランドが剣を抜くと、ピリオーノは草の上に倒れた。どす黒い血が緑を染めていった。

「あの島だ。あの島に行こう。まずは船だ。いい船を貰おう」

オルガが星の降臨地に着くと、ピリオーノは既にこと切れていた。すぐに街へ戻ろうと、海の方を振りむいたが、そこにはピピがいた。ピピはゆっくりと近づいてきて、倒れていたピリオーノを抱きかえた。そして、泣いた。全世界を一つの箱に入れたような、激情の涙だった。

オルガはしばらく黙ってそこに立っていたが、徐々に体が地面に近づいていった。膝をつき、頭を垂れた。

グランド盗賊団は、港で客船を奪い、島へと向かった。その間に自警団が盗賊の五人を殺し、一人を捕まえた。残りの十人近くは島に辿り着いたようだったが、アメル街へは戻ってこなかった。

それからの三年はオルガにとって、最悪の三年だった。母が病で死に、それを追うように一年後に父親がこの世を去った。家族は次々と彼のもとから消えた。残ったのはピピだけだった。だが、彼女のことは彼には分からなかった。分かるのは恋人を失ったという事実だけだった。

「誰も殺してくれないなら、私が殺すしかないじゃない。ううん。私が殺したいの。私があいつを殺したいの」とピピは言った。

オルガは黙って、その声を聞いた。そして階段を一段上った。

「それで、どうしたいんだ」

「三百モールでハンターになるの。ハンターになって、今、他のやつらが捕まえようとしている男を捕まえるの。たくさんのお金を手に入れて、あいつを探すの。他の国にいても、他の大陸にいても、絶対にあいつを見つけて殺すの」

ピピは目から涙を流しながら言った。ぼろぼろとそれは零れた。
「なるほど……。やっぱり、話せてよかった。最近は全然話してなかったからな」

そうオルガは言うのと、手を出した。

「探そう。あいつを探そう。姉さんの恋人を殺したあいつを、俺の兄を殺したあいつを探そう」

ピピは彼の手に手を置いた。

「オルガは三百モールも持っているの？」

「変に真面目なんだな。隠し場所は知っているのに、中身のことは調べなかったのか？」

「うん」

「持っているよ。それくらい。大酒飲みがいるからな。それくらいないと心配で仕方がないよ」

ピピは涙を拭いて、オルガの手を握りながら、ゆっくりと階段を下り始めた。

オルガはピピの気持ち少し分かって安心した。そして、最後の家族のためにできることはしようと星に誓った。

数日前からアメルの街にハンターが集まり始めた。その原因は一つだった。賞金首の一人がアメルの子へ向かったと噂がたつたからだ。

その殺人者の名前はオルトト。彼の犯した罪は、次の通りだ。

ドイムス市の有力者である、イガノを殺害。金庫を荒らし、金目の物を窃盗。彼を捕まえようとした、用心棒を一人、兵士を一人、そしてハンター二名を殺害。その後、近隣の村で食料を略奪。五歳になる少年一人を誘拐（のちに解放）。

殺害されたイガノに良くない噂があるのは知られていたが、彼が近くの山に炭鋤作り、ドイムス市に大きな金の流れを持ってきたのはそれよりも知られていた。イガノが死んだことによつて、市民と彼の周りにいた人々は、炭鋤の行方、そしてこれから潤うのだと期待していた未来を心配していた。炭鋤が市に住む個人のもの、もしくは市営になれば御の字だが、もし国のものになったのなら……そう考えているのが大半だった。

ドイムス市と国は、ハンター協同組合を通じ賞金首だったオルトトに報奨金一千モールを上乗せして懸けた。その結果、賞金の合計は一千五百モールになっている。賞金首としてはいい値段になったと、ハンターは口角が自然に上がるほど喜んだ。

もともとハンターというのは兼業が多い。農夫、漁師、その他の職業に就いている人々が、小遣い稼ぎにやるのだ。そのため多くのハンターは自分たちの土地を離れない。彼らが動くのは、自分たちの土地に獲物が入って来たときだ。

だが、今回のように多くのハンターが一つの場所に集まることもある。その場合、集まって来たハンターの大半は専業になり、少数がその土地の者と、近隣の町や村からやってきた者になる。

このような事件が起きた場合、一番喜ぶのは専業ハンターで、一

番鬱陶しく思うのは町の人々だ。自分の町が物騒なものを持ち歩くハンターで溢れるのは誰もが嫌だろう。とくにアメルのような観光の町で、治安が悪化するのは致命的でもあった。不幸中の幸いだっただのは、もうすぐ町が休みへと入る雨季だったということだ。だが、幸いはそれだけだった。

「三百モールは持った？」

ピピは眠りから覚めたばかりのオルガを見下ろしていた。

「いや」オルガは二日酔いで痛む頭を押さえた。「今、どのくらいだろう」

ベッドに座りながらオルガは考えた。昨日はどのくらい飲まされただろうか。今は日が昇ってからどれくらいだろう。今日は何があったかな――。

「あ」オルガは目と口を大きく開けた。「そうだ。食堂に行かないと。洗い物が」

そう言うときオルガは急いでベッドから立ち上がった。その勢いに驚いたピピは数歩下がり、自分のベッドに腰掛けることになった。

「仕事辞めて、ハンターになるんだよ」服を急いで脱ぎ、大きなクロゼットから仕事着を取り出しているオルガにピピは言った。

「そんなこと」オルガはズボンを履いている。「出来るわけないだろう」

「なんでー？ 昨日ハンターになるって言ったじゃん」

駄々っ子のようなオルガは思った。

「ハンターになるのはピピだろ。俺はいつも通り仕事をするよ」

「私、ハンターになるけどさ。オルガもハンターになるんだよ」

「はっ」オルガは嘲るように笑った。「俺は六百モールも持っていないよ」

「それは今、この町に来ている賞金首を捕まえればいいじゃん」

「捕まえられなかったらどうすんだよ。俺は仕事を続けなきゃならないんだよ」

「えー？」

「どっちにしろ、今すぐ辞めるわけにはいかないだろ。昼過ぎには帰ってくるから」オルガは洗濯していたシャツを着て、ズボンを紐で縛った。「あ、勝手にお金取らないでね」

「……ねえ。他のハンターに先越されるかもよ」

「……」

「ねえ。分かってるの？」

オルガは動きを止めた。ようやく起きた頭の中に甦ったのは、昨日、ピピとした会話だった。

自分は昨日何と言ったのだ。果たすべき責任は二つあるのではないか。

「……そうだったな。……分かってる」

「何が分かっているの？」

「全部だよ。全部」

「全部って？」

「——とにかく、俺は食堂とおじさんのところに行く。昼過ぎに帰ってくるから、それまで待ってて」

オルガはそう言つと、靴を履いて、外へ飛び出して行つた。

ピピはため息を吐きながら、窓を開けた。アルコールのくもった匂いが充満している部屋に、冷たい潮風が入りこんだ。空は薄い雲に覆われていて、太陽はおぼろげに海の上から空へ飛び立とうとしていた。塔の影も薄く、町にその影は届いていなかった。

ピピはずつと遠くを見た。暗くて重い感情が、彼女を内側から抱き締めた。助けを呼ばうと恋人の名前を呼びたくなつたが、ピピは必死に堪えた。そうすると残るのは昨日誓ったもの一つだった。

オルガはいつものように食堂「猫」へと行った。そして、テーブルにある食器やコップを集め、じゃれてくる猫をあしらいながら、それをキッチンへと持っていった。

キッチンには珍しく食堂の女将、アバラがいた。彼女は煙草を吸いながら、コップに葡萄酒を注いでいた。オルガが以前見たときと同じように、彼女は胸元の開いた長袖の白いブラウスに、白い花々の咲いた草色のスカートを履き、腰には茶色のエプロンを巻いていた。十歳を越える子供が二人いるが、その割に若く見えた。

「おはようございます」

オルガがそう挨拶するとアバラはこちらを見た。

「おはよう。今日は少し遅かったね」

「すみません」オルガは食器を流し台に置きながら言った。

「いいんだよ……」

「女将さんも、どうしたんですか。こんな遅くまで」

「まあ、ほら。今、ちよつとした話題があるじゃないか」アバラは灰を灰皿に落とし、煙草をゆつくりと燻らせた。

「ハンターですか？」

「そう。昨日の夜は、この店にも知らない男がたくさん来てたんだよ。うちの旦那も血の氣が多いだろ？　ちよつとしたいざござがあったんだよ」

アバラは煙草を深く吸い、遠くへ煙を飛ばした。

「おかげで昨日は自警団と兵士がやってきて、店を閉じさせられたんだよ。それから壊れた椅子やら、ぶちまけられた料理を片づけてたら、すぐに朝。旦那は漁に出て行って、店を手伝ってくれないし、片づけが終わったと思ったら、漁から帰って来た男たちがご飯食べにくるし……。疲れたけど、変に氣が高ぶっていてね。寝られないんだよ」

赤い葡萄酒を飲んだアバラの顔はたちまちそれと同じような色になった。

オルガは食堂とキッチンを往復し、食器を片づけながら女将の愚痴を聞いた。それに同情しながらも、オルガはあることについて考えていた。それは、女将にこの仕事を辞めたいと告げることだった。オルガは昨日ピピと約束した通り、賞金首を捕まえ、その賞金を元に兄を殺した盗賊を探すつもりでいた。しかし、今の女将にどう伝えればいいだろうか。自分も店を手伝わなくなると知れば、彼女は落胆するのではないか。

アバラはすでに三本目になっていた煙草の火を揉み消し、コップの底に少しだけ残っていた葡萄酒を飲み干した。

「さ、じゃあ私は昼まで寝ていようかね。あとは頼んだよ」

彼女は椅子から立ち上がり、奥の部屋へと向かった。

オルガはその背中を見た。喉の奥に何かが詰まっているせいで、言葉がうまく出てこなかった。しかし、彼女が何を思おうとも、言わなければならない。

「あの、女将さん」

アバラはその声に振り返る。

「どうした？」

「あの、明日からしばらく仕事に來れないかもしれません。——いや、今日で仕事を辞めたいんです」

アバラは開けかけていたドアを閉じた。

「どうした。何かあったのかい？」

「はい」

「もちろん話してくれるだろう？」

「はい」オルガはそう返事をして、持っていた布巾を流し台に置いた。「……実はハンターになろうと思うんです」

アバラは大声で笑った。それがなぜなのかオルガには分からなかった。

「ハンターになるって？」笑いを堪えながらアバラは言った。

「はい」

「なぜ？」

オルガの頭にはピピの顔が浮かび、その次に兄の姿が浮かんだ。

「兄を、殺した奴を探そうと思います。ピピとも話したんです」

「……」アバラは腕を組んだ。彼女の顔から笑いが消えた。「兄と
いうと、ピリオーノだね」

オルガは頷いた。

「……お前の考えていることは大よそだが分かるよ。ピリオーノの
仇を討とうとか考えているんだろ？」

オルガは再び頷いた。

「でもやめときな。今度の賞金首は——強いようだからね」彼女は
目線を下げた。「やってきたハンター共も言っていたよ。賞金に見
合った強さ、いや、それ以上ってね」

「それでも、僕は——」

「復讐したいってかい。まあ、勝手だよ。でも、この仕事を辞める
のは駄目だよ。せめて次の手伝いが見つかるまではお前さんにやつ
てもらおうよ」

「でも、それじゃあ——」

「今回は諦めな。まだ先はあるじゃないか。お金を貯めて、旅に出
るのには反対しないよ。仇を討ちたいという気持ちも分かる。いま
で、なんでそうしないんだろって思っていたくらいだよ。でも、
今回は駄目だよ。……それに私の都合っていうのもあるんだ。辞め
るのは許さないよ」

オルガはアバラを見た。しかし、アバラはオルガを見なかった。

「とりあえず今日は疲れたよ。また明日頼むよ」

アバラはそう言うと、ドアを開け、奥へ消えた。

オルガは布巾を手に取り、ため息を吐いた。とりあえず仕事を続
けようと、濡れた木製の食器を拭いたが、徐々に腹が立ってきた。
それは女将が言った一つの言葉のせいだった。『仇を討ちたいとい
う気持ちも分かる。今まで、なんでそうしないんだろって思っ

いたくらいだよ』。その言葉はオルガの心を揺らした。本当に、なぜそうしなかったのだろう。自分は兄を殺した奴を憎んでいたはずなのだ。自分とピピ、家族を守ろうと動いていたのを間違いだとは思わない。しかし、仇を討とうという気持ちはいつの間にか消えていた。さらに兄の無念さを忘れ、彼をただ死んだ人間だと感じていた。そんな自分に怒りを覚えていた。

オルガは食器を全て直したあと、布巾を思いつきり床に投げた。だが、いらだちは消えず、何をやっているんだろうかと、おかしな寂しさがこみ上げてきた。

しかし、まだ諦めるわけにはいかない。最後の手段として、アバラに対する責任を勝手に捨てることもオルガは考えていた。

身勝手な計画が早くも崩れ、意気消沈しながらも、オルガは次の職場へと向かった。南へ向かう彼の足取りは昨日よりも重かった。手に縄がついていたなら、奴隷に見えたかもしれない。

オルガは悪い予想をしていた。多くのハンターが来ているとなると、安宿は客がいっぱいだろう。しかも、態度の悪い客が。そうになると、オーナーは娘のクレルを宿には出さないかもしれない。そうになったら動かなければならないのは自分だ。それが、賞金首が捕まるまで続く……。つまり仕事を辞めることができない。

「はあ」思わずオルガはため息をついた。吸ったことのない煙草さえ吸いたくなった。

宿につくと、オルガは強く息を吐いて気合いを入れた。とりあえず仕事だ。

「あれ？」フロントに座っていたオーナー、アルベス才は驚いた表情で宿へ入ってくる青年を見た。「オルガ、どうした？」

「あ、おはようございます」

「おはようじゃないよ。星の降臨地はどうした？」

「ほしの……」オルガは徐々にそのことについて思い出した。「あ、オルガには今日、自警団としての務めがあった。」

「おいおい。お前が忘れものなんて珍しいな」アルベス才は口ひげを触って笑った。

「そうでした。すっかり忘れてました」

「まあ、まだ遅刻にはならんだろうから。なんならこっちの仕事もしていくかい？」からかうようにアルベス才は言った。

「……あの、おじさん」

「どうした？」アルベス才は宿帳を開きながら返事をした。

「お客さんは、ハンターが多いんですか？」

「いいや。昨日は客を取らなかった。何人か来たけど、満室だと言つて追い返したよ。クレルがいるし、もうすぐ雨季休みに入るからな。そろそろ客を出したいんだよ」

アルベス才は宿帳へ向けていた視線をオルガに移した。

「それより、おじさんって呼び方久しぶりだな。何かあったのか？」

「まあ、少し」

「そうか」

アルベス才はそう言っただけで、オルガの話を聞きだそうとはしなかった。オルガはそのせいで少し不安になった。彼が聞き出してくれば、自然と言葉は出てくるだろうに。

「おじさん——」オルガはさっきの二の舞にならないだろうかと心配していた。だが、言うしかない。「今まで、仕事をくれて本当に感謝してる。父が病に伏してからずっとお世話になりっぱなしだ」

「いいんだよ。お前の父親とは親友だったし、その息子は親戚の子供よりかわいいよ」

「おじさん……。実は宿の仕事を辞めたいんだ」

アルベス才は黙っていた。口ひげを触りながらオルガを見ていた。オルガはその沈黙に耐えられず、その理由についても自分から話した。女将の反応が脳裏によぎったが、それでも彼には説明以外の選択肢はなかった。何もなかったことには、もう出来なかった。

しかし、それは正々堂々としたものではなかった。オルガはまだ気づいていないが、彼は必死に逃げていた。責任という理由をつけて、彼は復讐をしようとしていた。彼にとつての復讐は、決して自分の感情に起因しているものではなかったのだ。

では昨晚の誓いは何だったのだろうか。復讐しようと思ったのは一時の気の迷いか、ピピの感情に酔ってしまっただけなのか。しかしオルガは、まだ、この問題さえにも到達していなかった。ただただ約束と責任という主人に囚われた駒に過ぎなかった。いざとなつたら責任さえも捨てるという覚悟は、情けないことに早くも彼の

外へと流れ出ていた。

その優柔不断な弱い意志に、オルガより早く気づいたのがアルベス才だった。「復讐」、果たしてそれはオルガのためになるのか、それは親友の子、自分が好んでいる人間の行いとして正しいのか……。そうアルベス才は考えていた。彼はオルガの話に驚きながらも、そこを見極めようとしていた。臆病さははらんだ危うい挑戦は、彼にどんな試練を与えるのか。彼がまだ子供で、挑戦が御使いだったらどれだけいいだろうか。彼の決めようとしているのは、明らかに命に関わることだ。この試練は生半可な意地じゃできない。

「……とにかく降臨地に行つてこい」アルベス才は言った。「お前が責任を感じているならそれを全うしろ」

その言葉にオルガは明らかに落胆した。それをアルベス才は確認した。

オルガは一度弱く頷き、宿の外に出た。弱々しいその背中に、アルベス才は悲しくもなり、腹立たしくもなった。しかし、それを叱責しようとは思えなかった。オルガが今まで気丈に振舞っていたことを知っている。兄が死に、母が死に、父が死んでも、オルガは足を前に出している。

道。アルベス才に突然舞い降りた言葉だった。

「オルガ」思わずアルベス才は名を呼んだ。

その大きな声にオルガは振り向いた。逆光のせいで、オルガの顔が宿内からはよく見えなかった。

「降臨地に、ピピを連れて行け」

ピピという名前にオルガは戸惑いの表情を見せ、アルベス才には何も言わずそのまま去っていった。

その残像を目の中に覚えながらアルベス才は思った。

オルガはまだ道を見つけていない。真つ白の光の中を用心しながら歩いているだけだ。それではいけない。彼には道が必要だ。

しかし、なぜピピの名前が出たのだらう。……きつと、復讐をするとピピと一緒に決めたからだらう。そうアルベス才は答えを出し

たが、どうも落ち着かなかった。

とにかく、と、アルベス才は椅子に深く腰を下ろした。

こちらが他人の決断を許すも許さないも無い。それが分かったら許可してやろう。

アルベス才は口ひげを触りながら宙を見た。そして、若かった自分と親友のことを思い出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5611t/>

神の世界で踊る者

2011年12月13日19時55分発行